

太宰府中学校2学年だより

No.10

R1.6.3

文責：石橋 眞子

なんで勉強しなきゃいけないの？

6月になりました。2週間後は、前期の中間考査が行われます。今回は、国語・数学・社会・理科・英語の5教科で、先週試験範囲が配られました。いくつかの教科は、1年生の後期後半に学習した内容も範囲になっているようです。「早めに・計画的に」取り組む必要がありますね。



さて、太宰府中学校では、家庭学習の習慣を身につけるために「MICHIZANEノート」を取り組んでいます。

授業で学んだことを中心に、毎日1ページ学習に取り組み、翌朝に提出します。2年生は、忘れたら昼休みに別室でやり直しをさせています。

残念ながら、この未提出者がなかなか0になりません。始まって2ヶ月近く経ちましたが、未だ0になったことがなく、毎日誰かがやり直しをしています。

ある時、ひとりの生徒が「なんで勉強しないといけないんだ？」とつぶやきました。やり直し学習への不満（自業自得と思いますが…）が、つい口に出たのでしょう。

「なんで勉強しなきゃいけないの？」これは、生徒である皆さんにとって、究極の悩みです。じゃ、その答えは？となるとこれまた十人十色で人様々。検索すれば、数多くの答えが「もっともらしく」掲載されています。

ということは、「答えは人それぞれ」で、自分で納得するものを見つけるしかないのです。

しかし、つぶやきを聞いた以上、私なりに答えをあげたいと思います。

右の話に出てくる卒業生は、現在35歳です。この話から数十年たった今は、建設会社の専務になり、あちこちの現場で働いています。

先月の日曜日、偶然にも〇ンズ〇ンで久しぶりに会って「今から仕事です。」と元気に挨拶してくれました。日曜日でも仕事で大変ねと返すと、「家族がいますんで…」と真剣な顔で答えてくれました。責任感のある、立派な大人になったな…と嬉しくなりました。

彼との久しぶりの出会いが、今日の通信を書くように呼んだかもしれません…

「先生、一次関数を教えてください！」

私が勤める中学校に、ひとりの卒業生が突然学校を訪ねてきました。彼は、中学校を卒業して高校に進学しましたが、途中でやめて職につきました。お風呂や流しなどのタイルを張るのが彼の仕事でした。



かつて担任だった私は、「一次関数」と聞いておや？と思いました。が、「わかった、教えましょう。」と、教室のほうに連れていきました。

二人だけになったところで、こうつぶやきました。

「先生、一次関数なんてどうでもいいんだよ。職員室に他の先生も大勢いるだろう。前に習ったことで、頭に残っていたやつを口からでまかせに言ったんだ。オレにもかっこうというものがあるし…」

「で、本当に教えてもらいたいのはかけ算なんだよ。この壁に何枚のタイルを貼ればよいのかわからないんだよ。タイルとタイルの間にはすきまもあるし…。その計算のしかたを教えてもらいたいんだよ。」

学校にいるときには、数学はまるでダメだったその生徒が、今働きに出て、数学の必要性を身にしみて感じ、必死にかつての教師に教えを乞う。

私は、このときほど「教師の仕事っていいもんだ」と思いました。早速、問題集を買ってきて、毎日仕事帰りにやってくるその子のために教室で教えました。

本当の勉強というのは、本当に知りたいという者と本当に教えたいという者との間に成り立つものではないでしょうか。

2週間が過ぎ、最後の別れ際に彼はこう言いました。

「実は、親方にいつも言われていたんだ。タイルは貼ればいいというもんじゃない。この床に何枚張ればよいかかわからなければ仕入れができない。有り余るほど仕入れたら、それだけ損をする。おまえはタイルを貼るのなんか頭はいらんと思ってきたんだろうが、大間違いだぞ。何をしても頭がいらんのだぞ。頭を使うのと使わないのでは、仕事っぷりもうんと差が出る。いい仕事をする職人には仕事も増える。頭を使わんで、ろくな仕事ができん職人は、仕事に来なくなる。」

おまえは学校へ行ったらんじゃないか。そのくらいの頭が使えるのかって言われちゃったんだ。」

「二・三年もすると、タイルを貼るだけでなく仕入れも時々やらなくちゃいけない。んで、どうしようもなく先生のところへ駆け込んできたんだ。恥ずかしかったけど…でも、いい経験になりました。今からでも勉強しなくちゃとそういう気になりました。これからはよろしくお願いします。」

